

保守点検の方法（1）

JHS-100, 100Aの測定は高感度分析になる場合が多いため常に装置を清浄にして置く必要があります。

流路を清浄に保つために、流路内への試料の滞留は必要最小限度にとどめて下さい。また、試料を取り出した後はすぐにブランクの試料管をセットして流路をパージして置きます。

ブランクテストでバックグラウンドが増えた場合次のように各部品を洗浄していきます。

☞試料管の洗浄

- (1) 試料管の洗浄は、一分析ごとに行います。洗浄は、予想される汚染物の良溶媒（例えばクロロホルム）そのあと、乾燥除去の容易な溶媒（例えばアセトン）で行います。
- (2) ネグチューブはディスポーザブルのチューブです。原則的には使い捨てにして下さい。再利用をされる場合は前項の試料管と同様に洗浄して下さい。
- (3) 頑固な試料管の汚染は、試料管をブンゼンバーナーで焼くと除去できます。ただしネグチューブは、並ガラスですのでバーナーで焼くと変形してしまいます。

☞試料管ホルダの洗浄

- (1) 汚染は最初試料管ホルダインサートにつきやすいので、分析後ホルダインサートを紙かガーゼでぬぐえば汚染を防止することができます。
- (2) 試料管ホルダの汚染がひどい場合は、下図を参考にして分解します。

ホルダインサート（テフロン）①を試料管ホルダからはずします。（M8スパナ使用）皿ねじ3本②をゆるめ黒色のホルダツマミ③を外し、ホルダをとめているEリング④をマイナスドライバではずします。ホルダネジ⑤Oリング⑥セプタム⑦を外します。試料管ホルダ、ホルダインサートは溶剤で洗浄しその後150℃で真空乾燥器または乾燥器で溶媒の除去を行います。

セプタム、Oリング（洗浄にアセトンは不適當）も同様に洗浄乾燥します。

☞洗浄不能のときは新しいOリング⑥やセプタム⑦と交換願います。

再組み立ては、⑤～①を逆の手順に組み立てます。

